

## ヒトはなぜ絵を描くのか ～暗闇アートの実践から～



大阪人間科学大学 子ども教育学科 講師 仁木裕美

### 1. 表現すること、絵を描くことが苦手な学生たち

保育者・教育者の養成に携わる教員であれば、学生の「図画工作」「美術」に対する苦手意識を問題視されている先生方も多いのではないのでしょうか。岡本（2005）は、“幼児期の子どもは、言語や身振り手振り、絵画、造形、歌、踊りなどの表現を通して、自己と対話し、外界とコミュニケーションをとりながら成長していく。” また、“表現とは自己の存在の意味を見いだす行為である。”と述べています。しかし、「絵を描く」という当然の欲求として行われていた行為が、なぜ、大人になるにつれて損なわれてしまうのでしょうか。

ひとつは、美術教育の中で（厳密には、美術という「授業」の中で!?) 他者の作品と比べて落ち込んだり、作品を笑われるなど、他者から受けた言動が要因となることが多いようです。つまり、個人だけでなく集団としての人的環境や学習空間が苦手意識の要因になっている可能性があるということです。これは、私が現在担当している授業の中で取る学生アンケートでも、同様の回答が多くみられました。

苦手意識を克服するための様々な研究や実践は、数多く重ねられていますが、今回、学内の大学生に行った授業内での実践で、偶然にも、苦手意識が軽減されるためのヒントを得ることができました。その内容を簡単にご紹介させていただこうと思います。

### 2. 暗闇アートの実践

#### (1) 洞窟壁画

「ヒトはなぜ描くのか」という壮大なテーマに思いを馳せるとき、必ず洞窟壁画に行き着きます。洞窟の中に描かれた壁画は、あらゆる表現の中で、我々の先祖が現代に残すことができた唯一の結果的産物

といえます。ショーベやラスコーの洞窟〈図1〉に描かれた躍動感溢れる動物たちの迫力に目を見張りながら（・・・と言っても残念ながら写真画像ですが！本物がみたい！）なぜ、光も届かないような洞窟の奥深くで、このような絵を描いたのでしょうか。その理由については諸説あるものの想像の域を出ることはありませんが、考えるだけでもワクワクします。2021年には、世界最古ではないかと言われる4万5500年以上前の洞窟壁画が、インドネシアで見つかったことも話題になりました。



〈図1〉ラスコー壁画（引用元：france.fra® フランス観光開発機構 web サイト／「世界遺産ラスコーの壁画」より）

## （2）活動の内容

そこで、「洞窟壁画を描く擬似体験をすることで、表現について考えよう」という活動を行いました。この活動は、洞窟空間を模すために、室内を消灯し真っ暗にした教室の中で行います。そして、その暗闇の中で、LED ティーライトの仄かな光を頼りに、ヒトが洞窟の壁に直接描いたように、教室の机や椅子や床に直に描けるようにしました。このような擬似体験を通して「描く」という表現行為について考えてみよう、感じてみよう、という試みです。これを勝手ながら「暗闇アート」と名付けました。

## （3）実施概要

科目名：「FA 演習」

対象者：子ども教育学科1年次生（45名）と2～4年次生  
（7名）計52名

日時：2022年7月15日 4限目

時間：1コマ（90分）の中で全ての活動を行う。

準備物：LED ティーライト、水でおとせるしかくいクレパス、濡れ雑巾、バケツ



〈図2〉水でおとせるしかくいクレパス

ヒトが洞窟内に持ち込んだであろう火の代わりとして選んだのは、ゆらゆらと本物の蠟燭のような揺らぎがわずかに発生する小さな LED ライトです。熱量や揺らぎなどは圧倒的に本物の火に劣りますが、火事や事故の危険を考えると仕方のない選択でした。肝心の描画材としては、水でおとせるクレパス（以下、パス）〈図2〉を使用しました。濡れ雑巾で拭けば綺麗に消すことができますので、教室の原状復帰も問題ありません。これで、机や椅子や床などの空間に存分に描くことができると考えました。

#### （４）活動の様子

活動を始める前に、洞窟壁画について触れながら、ヒトの根源的な表現について全体で共有をしました。そして、まずは「ヒトはなぜ描くのか」について、学生がどのように考えているかを知るため自由記述式のアンケートを実施しました。

アンケートの回答後、パスで机に直接描く姿を見せながらどこに描いてもよいことを伝えると、教室から悲鳴が上がりました。幼少期にいたずら描きをして怒られた経験もあったことでしょうか。彼らは、絵は紙に描くものという思い込みがあったようです。（少なくとも大学生になれば、それなりの立派な紙に描けるのだという思い込みが！）

次は、いよいよ暗闇での活動に入ります。最初は、パスを持ちながら戸惑う様子が見られましたが、そのうち、堰を切ったように手が動きはじめました。ひとりで集中して机に描く〈図3〉。集団で楽しく床に描く〈図4〉。机から椅子へ、椅子から床へと、描画の対象となる範囲もどんどん広がっていきました〈図5〉〈図6〉〈図7〉。暗いので色の判別はほとんど付きません。それでも、線や丸だけの幾何学模様、動物、人、キャラクターなど、様々な形態が描画されていましたが、とにかく楽しそうなのです。時間が経つにつれて気持ちが高揚していく様子が教室全体から感じられました〈図8〉。あっという間に時間が過ぎていきました。



〈図3〉ひとりで机に描く



〈図4〉みんなで集まるとより明るい条件で描くことができる



〈図5〉ひとりで床に描く



〈図6〉教卓の側面に描く



〈図7〉だんだん絵が増えていく



〈図8〉教室の様子（※後方が明るいのは途中換気のため）



〈図9〉明るくして確認



〈図10〉思っていた色と違った



〈図11〉模様も描かれる



〈図12〉塗り潰されている



〈図13〉濡れ雑巾で拭くと消える

本来の洞窟壁画をイメージするなら、教室の明かりをつけて描いたものを確認することは、洞窟壁画界の事実におそらく即しません、この活動では全体で鑑賞する時間も設けました〈図9〉〈図10〉〈図11〉〈図12〉。その後、教室の原状復帰を行い〈図13〉、活動後の学生の考えの変化を知るために、「人はなぜ絵を描くのか？」についてのアンケートを再び実施しました。加えて、この活動を通して気がついたこと、感じたことなどについても自由記述してもらいました。〈表1〉

さて、学生たちは暗闇の中で何を見たのでしょうか。

〈表1〉 本日の活動を通して、気がついたこと、感じたことなどを自由に述べてください。（※一部抜粋）

- A. 本日の活動を通して気がついたことは1人で絵を描くことも非常に楽しいのですが、人と一緒に描くことがとても楽しく有意義な時間であると感じることが出来ました。絵を描くという行為自体を大切に、絵の完成度や綺麗な絵を描くことだけが絵を描くという行為ではなく人との関わりを大切にできるものであると感じました。
- B. 絵を描くという共通目的を持った者同士、会話をしてみたり、一緒に絵を完成させたりすることが出来たことなど、この活動を通し絵は人との繋がりを結ぶものだと考えることも出来ました。
- C. 絵は下手で今まであまり描かなかったが今こうやって描いて自分が考えてる事をそのまま絵で伝えられる事はとても素晴らしく、語彙力無くても相手に伝えられとても便利である。
- D. 普段から机や床に描くことがだめという考えがあるので最初水で消えると知らされていても、ちょっと描くのに抵抗があったけど、描いていくうちにどんどん楽しくなっていった。友達と一緒に描くのも久しぶりでとても楽しかった。
- E. 絵を描くって自由なんだと感じた。自分は模写とか絵を描くのが下手だから苦手だけど今日は何も考えずに自由に描くことが出来たから楽しく絵を描くことが出来た。
- F. 何万年も前の人は、こんな暗闇の中描いて、あんな上手な絵で凄いなとこの活動を通して思った。
- G. 絵が苦手だからとか、どんなものを描こうかなと思っていてもすごく自由に表現をしていたので、楽しんでこの活動を行うことが出来ました。
- H. 題材もなく、ただただ自由に絵を描くのは本当に久しぶりだったので新鮮だったし、子どもの頃に戻れた気がしました。子どもたちが絵を描くのが好きな理由も分かりました。
- I. 一人で絵を描くことも楽しいが友達と話しながら描くことも楽しいんだと感じました。
- J. 何より今回のように暗闇でものを描くのはなぜかうキウキしたし自分の心も洗われるようだった。あの昔の壁画を描いていた祖先たちも楽しみながらあの絵を描いていたらいいなと思った。自分を自由に表現したり描きたいものを自由な場所に描くのは楽しい。
- K. 上手とか下手とかじゃなく、今の楽しい気持ちを表現した今日の絵はすごく素敵な思い出になった。
- L. 絵を描いていると集中してしまい、周りが見えなくなってしまう。だがそれも絵を描くことの魅力の一つだと思う。
- M. とても楽しくて、つぎ何描こうかななど今描いている絵を描きながら次描きたい絵を考えるほどワクワクしていて、絵を描いている時にこんな気持ちになったのは初めてでした。
- N. 私は絵を描くのが苦手であまり好きではなかったのですが、絵を描くのが好きや嫌い、得意、苦手は関係なく友達や仲間と暗闇で自由に好きなことを描くことが楽しいと感じました。
- O. 大事なものは絵の上手さではなく自分の世界を表現することが大事だと気がきました。
- P. 自分自身で絵を描くことも楽しいですが、今日みんなが絵を描いてる姿をみてとても楽しそうに描いていたので絵を描くことはみんなを笑顔にできることが分かりました。

### 3. 結果と考察

#### (1) 学生の自由記述回答より

活動前の問い「人はなぜ絵を描くのか？」に対しては、「コミュニケーションの手段として」「ストレス解消のため」「楽しいから」「心を豊かにしたいから」「表現したいから」などの回答が多くあり、活動後には彼らのそれらの考えを裏付ける結果にもなりました。しかし、まだ十分な考察ができていませんので今後分析が必要です。これについては別稿に譲るとして、ここで注目したいのは、「今までは絵を描くことは苦手で嫌いだったが、活動によって少し楽しいと思えるようになった」「みんなで描くことが楽しい」という回答が多く見られたことです。

#### (2) 考察

この活動は暗い中で行うため、何を描いているのか、全体像がどうなっているのか、色はどうなのかなどは把握が難しい活動です。そのため、もはや成果物としての絵の出来栄えにとらわれず、描くプロセスそのものに意味を感じたのではないかと考えました。また、「描くという手段でコミュニケーションを取ることが楽しい」という学生の体験を踏まえ、今後、造形表現の授業へ繋げていく必要があります。

日本は明るさ信仰のもと、生活を過度にスピード化させてきました。そのために、闇の中で想像力を働かせる時間と感性を失ったとも言えます。谷崎潤一郎は「陰翳礼讃」の中で、翳りの中における美意識について言及し、宮崎駿監督は「トトロの住む家(2018)」の中で、“今のように隅々まで照明の行き届いた、闇のない家で暮らす子供の心に「この世の何か不思議なもの」を見出す心が育つのか・・・”と憂えています。また、小松(2003)は、未知のものに対する恐れを託した「妖怪」や「伝説」への想像力について、“いつの時代も人間は、その内部と外部の双方に制御しえない「闇 = 異界」を抱え込んでいた。”と述べました。「暗闇で描くこと」は、「闇 = 異界」と接点を持つとする行為なのかもしれません。

### 4. さいごに

描くという根源的な欲求はどういうものか、非日常体験とも言える暗闇アートの実践は、描くことの意味を個々の学生が体験的に見出す手がかりとなりました。暗闇という日常の向こう側との狭間に身をおいて描く行為は、学生の心を解放し、潜在的な感性に働きかけることができたように思います。また、今までは絵を描くのが苦手だった学生が、暗闇の中では、自然と手が動いた、描くことが楽しくなった、と感じたという側面も見逃せない結果であると考えます。(暗闇フィットネスが流行るのも頷けます。)

描くことの楽しさや意味を体験的に知っていることは、将来、保育・教育の現場で子どもたちと関わる学生にとって大きな価値があります。子どもが表現している姿に「そうそう、わかるよ、その気持ち!」という共感を伴うまなざしを向けることのできる保育者・教育者になってほしいと切に願います。

今回は、簡単にご紹介に留まりましたが、今後、学生が記述したアンケート内容を質的に分析していくことで、子どもの表現活動を支援できる保育者・教育者養成の一助となるよう努めて参ります。

## 【引用文献】

岡本夏木「幼児期一子どもは世界をどうつかむかー」（2005）岩波書店

小松和彦「異界と日本人」（2003）角川書店

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」（1975）中央公論新社

フランス観光開発機構 web サイト <https://jp.france.fr/ja/bordeaux/article/30174>（アクセス：2022/09/16）

宮崎駿「トトロの住む家」（2018）岩波書店

## 【参考文献】

中原佑介「ヒトはなぜ絵を描くのか」（2010）フィルムアート社

齋藤亜矢「ヒトはなぜ絵を描くのか」（2020）岩波書籍